

或敵打の話

芥川龍之介

青空文庫

発端

肥後の細川家の家中に、田岡甚太夫と云う侍がいた。これは以前日向の伊藤家の浪人であつたが、当時細川家の番頭に陞つていた内藤三左衛門の推薦で、新知百五十石に召し出されたのであつた。

ところが寛文七年の春、家中の武芸の仕合があつた時、彼は表芸の槍術で、相手になつた侍を六人まで突き倒した。その仕合には、越中守綱利自身も、老職一同と共に臨んでいたが、余り甚太夫の槍が見事なので、さらに劍術の仕合をも所望した。甚太夫は竹刀を執つて、また三人の侍を打ち据えた。四人目には家中の若侍に、新陰流の劍術を指南している瀬沼兵衛が相手になつた。甚太夫は指南番の面目を思つて、兵衛に勝を譲ろうと思つた。が、勝を譲つたと云う事が、心あるものには分るように、手際よく負けたいと云う気もないではなかつた。兵衛は甚太夫と立合いながら、そう云う心もちを直覺すると、急に相手が憎くなつた。そこで甚太夫がわざと受太刀になつた時、奮然と一本突きを入れた。甚太夫は強く喉を突かれて、仰向けにそこへ倒れてしまった。そ

の容子がいかにも見苦しかった。綱利は彼の槍術を賞しながら、この勝負があつた後は、甚不興気な顔をしたまま、一言も彼を犒わなかつた。

甚太夫の負けざまは、間もなく蔭口の的になつた。「甚太夫は戦場へ出て、槍の柄を切り折られたら何とする。可哀や剣術は竹刀さえ、一人前には使えないそうな。」——こんな噂が誰云うとなく、たちまち家中に広まつたのであつた。それには勿論同輩の嫉妬や羨望も交つていた。が、彼を推挙した内藤三左衛門の身になって見ると、綱利の手前へ対しても黙つている訳には行かなかつた。そこで彼は甚太夫を呼んで、「ああ云う見苦しい負を取られては、拙者の眼がね違いばかりではすまされぬ。改めて三本勝負を致されるか、それとも拙者が殿への申訳けに切腹しようか。」とまで激語した。家中の噂を聞き流していたのでは、甚太夫も武士が立たなかつた。彼はすぐに三左衛門の意を帯して、改めて指南番瀬沼兵衛と三本勝負をしたいと云う願書を出した。

日ならず二人は綱利の前で、晴れの仕合をする事になつた。始は甚太夫が兵衛の小手を打つた。二度目は兵衛が甚太夫の面を打つた。が、三度目にはまた甚太夫が、したたか兵衛の小手を打つた。綱利は甚太夫を賞するために、五十石の加増を命じた。兵衛は蚯蚓みみずば腫れになつた腕を撫なでながら、悄悄すずこ綱利の前を退いた。

それから三四日経つたある雨の夜、加納平太郎と云う同家中の侍が、西岸寺の堀外で暗打ちに遇つた。平太郎は知行二百石の側役で、算筆に達した老人であつたが、平生の行状から推して見ても、恨を受けるような人物では決してなかつた。が、翌日瀬沼兵衛の逐天した事が知れると共に、始めてその敵が明かになつた。甚太夫と平太郎とは、年輩こそかなり違つていたが、背恰好はよく似寄つていた。その上定紋は二人とも、同じ丸に抱き明姜であつた。兵衛はまず供の仲間が、雨の夜路を照らしている提灯の紋に欺かれ、それから合羽に傘をかぎした平太郎の姿に欺かれて、粗忽にもこの老人を甚太夫と誤つて殺したのであつた。

平太郎には当時十七歳の、求馬と云う嫡子があつた。求馬は早速公の許を得て、江越喜三郎と云う若党と共に、当時の武士の習慣通り、敵打の旅に上る事になつた。甚太夫は平太郎の死に責任の感を免れなかつたのか、彼もまた後見のために旅立ちたい旨を申し出でた。と同時に求馬と念友の約があつた、津崎左近と云う侍も、同じく助太刀の儀を願ひ出した。綱利は奇特の事とあつて、甚太夫の願は許したが、左近の云い分は取り上げなかつた。

求馬は甚太夫喜三郎の二人と共に、父平太郎の初七日をすますと、もう暖国の桜は散

り過ぎた熊本くまもとの城下を後にした。

一

津崎左近つぎさきさこんは助太刀すけだちの請こいを却しりぞけられると、二三日家に閉じこもっていた。兼ねて求馬もとめと取換かした起請文きしょうもんの面おもてを反故ほごにするのが、いかにも彼にはつらく思われた。のみならず朋輩ほうばいたちに、後指うしろゆびをさされはしないかと云う、懸念けねんも満更まんげないではなかった。が、それにも増して堪え難かつたのは、念友ねんゆうの求馬もとめを唯一人甚太夫じんだゆうに託すと云う事であった。そこで彼は敵打かたきうちの一行いっこうが熊本の城下を離れた夜よ、とうとう一封の書を家に遺して、彼等の後あとを慕あこうべく、双親ふたおやにも告げず家出をした。

彼は国境くにぎわいを離れると、すぐに一行に追いついた。一行はその時、ある山駅さんえきの茶店ちあてんに足を休めていた。左近はまず甚太夫の前へ手をつきながら、幾重いくえにも同道を懇願こんがんした。甚太夫は始はじめは苦々にくにくしげに、「身みどもの武道では心もとないと御思ごしいか。」と、容易よういに承うけ引く色を示さなかつた。が、しまいには彼も我がを折おつて、求馬の顔を尻眼しりまなこにかけながら、喜三郎きさぶろうの取りなしを機会しおにして、左近の同道を承諾しょうやくした。まだ前髪まえがみの残のこっている、女

のような非力ひりきの求馬は、左近をも一行に加えたい気色けしきを隠す事が出来なかつたのであつた。左近は喜びの余り眼に涙を浮べて、喜三郎にさえ何度となく礼の言葉を繰返くりかえしていた。

一行四人は兵衛ひょうえの妹婿いもうとむこが浅野家の家中にある事を知っていたから、まず文字もじが関せきの瀬戸せとを渡つて、中国街道ちゆうごくかいどうをはるばると広島ひろしまの城下じやうげまで上つて行つた。が、そこに滞在ざいざいして、敵かたきの在処あつかを探さぐる内に、家中さむらいの侍さむらいの家へ出入でいりする女の針立はりたての世間話よこしまから、兵衛は一度広島へ来て後のち、妹婿いもうとむこの知るべがある予州よしゆう松山まつやまへ密々に旅立つたと云う事がわかつた。そこで敵打かたうちの一行はすぐに伊予船いよふねの便びんを求めて、寛文かんぶん七年の夏の最中もなか、恙つつがなく松山の城下へはいつた。

松山に渡つた一行は、毎日編笠あみがさを深くして、敵かたきの行方ゆくえを探して歩いた。しかし兵衛も用心よこしまが厳きびしいと見えて、容易やすに在処あつかを露あらわさなかつた。一度左近が兵衛らしい梵論子ぼろんじの姿に目をつけて、いろいろ探りを入れて見たが、結局何ゆかりの由縁ゆかりもない他人だと云う事が明あかになつた。その内にもう秋風が立つて、城下の屋敷町の武者窓の外には、溝ふたを塞ふさいでいた藻もの下から、追い追おい水の色が拈ねがつて来た。それにつれて一行の心には、だんだん焦燥せうそうの念ねんが動き出した。殊ことに左近は出合であひをあせて、ほとんど昼夜じゆうやの嫌きらいなく、松山の内外うちとそとを窺うかがつて歩いた。敵打かたうちの初太刀しよたぢは自分が打ちたい。万ま一いち甚し太夫たうふに遅おそれては、主親しゆうおやをも捨す

てて一行に加わった、武士たる自分の面目が立たぬ。——彼はこう心の内に、堅く思いつめていたのであった。

松山へ来てから一月余り後、左近はその甲斐があつて、ある日城下に近い海岸を通りかかると、忍駕籠につき添うた二人の若党が、漁師たちを急がせて、舟を仕立てているのに遇った。やがて舟の仕度が出来たと見えて、駕籠の中の侍が外へ出た。侍はすぐに編笠をかぶったが、ちらりと見た顔貌は瀬沼兵衛に紛れなかつた。左近は一瞬間ためらった。ここに求馬が居合せないのは、返えす返えすも残念である。が、今兵衛を打たなければ、またどこかへ立ち退いてしまう。しかも海路を立ち退くとあれば、行く方をつき止める事も出来ないのに違いない。これは自分一人でも、名乗をかけて打たねばならぬ。——左近はこう咄嗟に決心すると、身仕度をする間も惜しいように、編笠をかなぐり捨てるが早いか、「瀬沼兵衛、加納求馬が兄分、津崎左近が助太刀覚えたか。」と呼びかけながら、刀を抜き放つて飛びかかった。が、相手は編笠をかぶったまま、騒ぐ気色もなく左近を見て、「うろたえ者め。人違いをするな。」と叱りつけた。左近は思わず躊躇した。その途端に侍の手が刀の柄前にかかつたと思うと、重ね厚の大刀が大袈裟に左近を斬り倒した。左近は尻居に倒れながら、目深くかぶつた編笠の下に、始めて瀬沼兵衛の顔

をはつきり見る事が出来たのであった。

二

左近さこんを打たせた三人の侍は、それからかれこれ二年間、敵兵衛かたきようえの行く方ゆえを探つて、五畿内きないから東海道をほとんど隈なく遍歴した。が、兵衛の消息は、杳ようとして再び聞えなかつた。

寛文九年かんぶんの秋、一行は落ちかかる雁かりと共に、始めて江戸の土を踏んだ。江戸は諸国の老若貴賤ろうじやくきせんが集まつている所だけに、敵の手がかりを尋ねるのにも、何かと便宜が多そうであつた。そこで彼等はまず神田の裏町うらまちに仮の宿を定めてから甚太夫しんだゆうは怪しい謡うたいを唱つて合ごうりき力を請う浪人になり、求馬もとめは小間物の箱を背負せおつて町家ちようかを廻る商人あきゆうどに化け、喜三郎きさぶろうは旗本はたもと能勢惣右衛門ねんきぎへ年期切りの草履取ぞうりりにはいつた。

求馬は甚太夫とは別々に、毎日府内をさまよつて歩いた。物慣れた甚太夫は破れ扇あしに鳥目うもくを貫いながら、根気よく盛り場うかがを窺うかがいまわつて、さらに倦うむ気色けしきも示さなかつた。が、年若な求馬の心は、編笠やっに憔悴やっれた顔を隠して、秋晴れの日本橋にほんばしを渡る時でも、結局

彼等の敵打は徒勞に終つてしまひ、そんな寂しさに沈み勝ちであつた。

その内に筑波風しがだんだん寒さを加え出すと、求馬は風邪が元になつて、時々熱が昂ぶるようになった。が、彼は悪感を冒しても、やはり日毎に荷を負うて、商に出る事を止めなかつた。甚太夫は喜三郎の顔を見ると、必ず求馬のけなげさを語つて、この主思いの若党の眼に涙を催させるのが常であつた。しかし彼等は二人とも、病さえ静に養うに堪えない求馬の寂しさには気がつかなかつた。

やがて寛文十年の春が来た。求馬はその頃から人知れず、吉原の廓に通い出した。相手方は和泉屋の楓と云う、所謂散茶女郎の一人であつた。が、彼女は勤めを離れて、心から求馬のために尽した。彼も楓のもとへ通つている内だけ、わずかに落莫とした心もちから、自由になる事が出来たのであつた。

渋谷の金王桜の評判が、洗湯の二階に賑わう頃、彼は楓の真心に感じて、とうとう敵打の大事を打ち明けた。すると思いがけなく彼女の口から、兵衛らしい侍が松江藩の侍たちと一しよに、一月ばかり以前和泉屋へ遊びに来たと云う事がわかつた。幸、その侍の相方の籤を引いた楓は、面体から持ち物まで、かなりはつきりした記憶を持つていた。のみならず彼が二三日中に、江戸を立つて雲州松江へ赴こうとしている事

なぞも、ちらりと小耳こみみに挟んでいた。求馬は勿論喜んだ。が、再び敵打の旅に上るために、楓と当分——あるいは永久に別れなければならぬ事を思うと、自然求馬の心は勇まなかつた。彼はその日彼女を相手に、いつもに似合わず爛醉らんすいした。そうして宿へ帰つて来ると、すぐに夥おびただしく血を吐いた。

求馬は翌日から枕についた。が、何故なぜか敵の行方が略ほぼわかつた事は、一言も甚太夫には話さなかつた。甚太夫は袖乞そでこいに出る合あい間を見ては、求馬の看病にも心を尽した。ところがある日葺屋町ふきやちやうの芝居小屋などを徘徊はいかいして、暮方宿へ帰つて見ると、求馬は遺書を啣くわえたまま、もう火のはいつた行燈あんどうの前に、刀を腹へ突き立てて、無残な最後を遂げていた。甚太夫はさすがに仰ぎやうてん天しながら、ともかくもその遺書を開いて見た。遺書には敵の消息と自刃じじんの仔細しさいとが認めてあつた。「私儀わたくしぎ 柔弱にゆうじやく 多病につき、敵打の本懐も遂げ難きやに存ぜられ候そうろうあいだ 間……」——これがその仔細の全部であつた。しかし血に染んだ遺書の中には、もう一通の書面が巻きこんであつた。甚太夫はこの書面へ眼を通すと、おもむろに行燈をひき寄せて、燈心とうしんの火をそれへ移した。火はめらめらと紙を焼いて、甚太夫の苦にがい顔を照らした。

書面は求馬が今年ことしの春、楓かえでと二世の約束をした起請文きしやうもんの一枚であつた。

三

寛文十年の夏、甚太夫は喜三郎と共に、雲州松江の城下へはいった。始めて大橋の上に立って、宍道湖の天に群っている雲の峰を眺めた時、二人の心には云い合せたように、悲壮な感激が催された。考えて見れば一行は、故郷の熊本を後にしてから、ちようどこれで旅の空に四度目の夏を迎えるのであった。

彼等はまず京橋界隈の旅籠に宿を定めると、翌日からすぐに例のごとく、敵の所在を窺い始めた。するとそろそろ秋が立つ頃になって、やはり松平家の侍に不伝流の指南をしている、恩地小左衛門と云う侍の屋敷に、兵衛らしい侍のかくまわれている事が明かになった。二人は今度こそ本望が達せられると思った。いや、達せずには置かないと思った。殊に甚太夫はそれがわかった日から、時々心頭に抑え難い怒と喜を感じずにはいられなかつた。兵衛はすでに平太郎一人の敵ではなく、左近の敵でもあれば、求馬の敵でもあった。が、それよりも先にこの三年間、彼に幾多の艱難を嘗めさせた彼自身の怨敵であった。——甚太夫はそう思うと、日頃沈着な彼にも似合わず、すぐさま恩地の屋

敷へ踏みこんで、勝負を決したいような心もちさえした。

しかし恩地小左衛門は、山陰さんいんに名だたる剣客であった。それだけにまた彼の手足しゆそくとなる門弟の数も多かった。甚太夫はそこで惴はやりながらも、兵衛が一人外出する機会を待たなければならなかった。

機会は容易に來なかつた。兵衛はほとんど昼夜とも、屋敷にとじこもっているらしかつた。その内に彼等の旅籠はたごの庭には、もう百日紅ひやくじつこうの花が散つて、踏石ふみいしに落ちる日の光も次第に弱くなり始めた。二人は苦しい焦燥の中に、三年以前返り打に遇つた左近の祥月しょうげつ命めい日を迎えた。喜三郎はその夜、近くにある祥光院しょうこういんの門を敲たたいて和尚おしょうに仏事を修して貰つた。が、万一おもんばかを慮つて、左近の俗名ぞくみょうは洩もらさずにいた。すると寺の本堂に、意外にも左近と平太郎との俗名を記した位牌いはいがあつた。喜三郎は仏事が終つてから、何気ない風なげを装よそおつて、所化しよけにその位牌ゆかりの由縁ゆかりを尋ねた。ところがさらに意外な事には、祥光院しょうこういんの檀家たる恩地小左衛門のかかり人びとが、月に二度の命日には必ず回向えこうに來ると云う答があつた。「今日も早くに見えました。」——所化は何も気がつかないように、こんな事までもつけ加えた。喜三郎は寺の門を出ながら、加納親子かのうや左近の靈が彼等に冥助みやうじよを与えているような、氣強さを感じずにはいられなかつた。

甚太夫は喜三郎の話を聞きながら、天運の到来を祝すと共に、今まで兵衛の寺詣でに氣づかなかつた事を口惜しく思った。「もう八日経てば、大檀那様の御命日でございませう。御命日に敵が打てますのも、何かの因縁でございませう。」——喜三郎はこう云つて、この喜ばしい話を終つた。そんな心もちは甚太夫にもあつた。二人はそれから行燈を囲んで、夜もすがら左近や加納親子の追憶をさまざま語り合つた。が、彼等の菩提を弔つてゐる兵衛の心を酌む事などは、二人とも全然忘却してゐた。

平太郎の命日は、一日毎に近づいて来た。二人は妬刃を合せながら、心静にその日を待つた。今はもう敵打は、成否の問題ではなくなつてゐた。すべての懸案はただその日、ただその時刻だけであつた。甚太夫は本望を遂げた後の、逃き口まで思い定めてゐた。ついにその日の朝が来た。二人はまだ天が明けない内に、行燈の光で身仕度をした。甚太夫は菖蒲革の裁付けに黒紬の衿を重ねて、同じ紬の紋付の羽織の下に細い革の襷をかけた。差料は長谷部則長の刀に來国俊の脇差しであつた。喜三郎も羽織は着なかつたが、肌には着込みを纏つてゐた。二人は冷酒の盃を換わしてから、今日までの勘定をすませた後、勢いよく旅籠の門を出た。

外はまだ人通りがなかつた。二人はそれでも編笠に顔を包んで、兼ねて敵打の場所と定

めた祥光院しょうこういんの門前へ向つた。ところが宿を離れて一二町行くと、甚太夫は急に足を止めて、「待てよ。今朝けさの勘定は四文釣銭しもんが足らなかつた。おれはこれから引き返して、釣銭の残りを取つて来るわ。」と云つた。喜三郎はもどかしそうに、「高たかが四文のはした銭ぜにではございませんか。御戻りになるがものはございますまい。」と云つて、一刻も早く鼻の先の祥光院まで行つていようとした。しかし甚太夫は聞かなかつた。「鳥ちようもく目は元より惜しくはない。だが甚太夫ほどの侍も、敵打の前にはうろたえて、旅籠の勘定を誤つたとあつては、末代まつだいまでの恥辱になるわ。その方は一足先へ参れ。身どもは宿まで取つて返そう。」——彼はこう云い放つて、一人旅籠へ引き返した。喜三郎は甚太夫の覺悟に感服しながら、云われた通り自分だけ敵打の場所へ急いだ。

が、ほどなく甚太夫も、祥光院の門前に待つていた喜三郎と一しよになつた。その日は薄雲が空に迷つて、朧おぼろげな日ざしはありながら、時々雨の降る天気であつた。二人は両方に立ち別れて、棗なつめの葉が黄ばんでいる寺の堀外へいそとを徘徊はいかいしながら、勇んで兵衛の参詣を待つた。

しかしかれこれ午ひる近くなつても、未いまだに兵衛は見えなかつた。喜三郎はいら立つて、さりげなく彼の参詣の有無を寺の門番に尋ねて見た。が、門番の答にも、やはり今日はどうし

たのだから、まだ参られぬと云う事であつた。

二人は惴^{はや}る心を静めて、じつと寺の外に立っていた。その間に時は用捨なく移つて、やがて夕暮の色と共に、棗の実を食^はみ落す鴉^{からす}の声が、寂しく空に響くようになった。喜三郎は氣を揉^もんで、甚太夫の側へ寄ると、「一そ恩地の屋敷の外へ参つて居りましょうか。」と囁いた。が、甚太夫は頭^{かしら}を振つて、許す気色^{けしき}も見せなかつた。

やがて寺の門の空には、這^はい塞^{ふさ}がた雲の間に、疎^{まばら}な星影がちらつき出した。けれども甚太夫は扉に身を寄せて、執^{しゆう}念^{ねん}く兵衛を待ち続けた。實際敵を持つ兵衛の身としては、夜^よ更^ふけに人知れず仏参をすます事がないとも限らなかつた。

とうとう初夜^{しよや}の鐘が鳴つた。それから二更^{にこう}の鐘が鳴つた。二人は露に濡れながら、まだ寺のほつりを去らずにいた。

が、兵衛はいつまで経つても、ついに姿を現さなかつた。

大団円

甚^{じん}太^た夫^{ふう}主従は宿を変えて、さらに兵衛^{ひやうえ}をつけ狙つた。が、その後^ご四五日すると、甚

太夫は突然真夜中から、烈しい吐瀉としやを催し出した。喜三郎きざぶろうは心配の余り、すぐにも医者を迎えたかったが、病人は大事の洩れるのを惧おそれて、どうしてもそれを許さなかった。

甚太夫は枕に沈んだまま、買い薬を命に日を送った。しかし吐瀉は止まなかった。喜三郎はどうとう堪え兼ねて、一応医者しんみやくの診脈を請うべく、ようやく病人を納得させた。そこで取りあえず旅籠はたごの主人に、かかりつけの医者を迎えて貰った。主人はすぐに人を走らせて、近くに技ぎを売っている、松木蘭袋まつきらんたいと云う医者を呼びにやった。

蘭袋は向井靈蘭むかいれいらんの門に学んだ、神方しんぼうの名の高い人物であった。が、一方また豪傑ごうけつ肌はだの所もあって、日夜杯さかすきに親みながらさらに黄白こうはくを意としなかった。「天雲あまくもの上をかけるも谷水をわたるも鶴つるのつとめなりけり」——こう自ら歌ったほど、彼の薬を請うものは、上かみは一藩の老職から、下は露命しもも繋つなぎ難い乞食非人こじきひにんにまで及んでいた。

蘭袋は甚太夫の脈をとって見るまでもなく、痢病りびょうと云う見立てを下くだした。しかしこの名医の薬を飲むようになってもやはり甚太夫の病は癒なほらなかつた。喜三郎は看病かたわらの傍かたわら、ひたすら諸もろもろ々の仏神に甚太夫の快方を祈願した。病人も夜長の枕元に薬を煮にる煙かを嗅かぎながら、多年の本望を遂げるまでは、どうかして生きていたいと念じていた。

秋あきは益ますます深こくなつた。喜三郎は蘭袋の家へ薬を取りに行く途中、群を成した水鳥しみずが、屢しばしば空

を渡るのを見た。するとある日彼は蘭袋の家の玄関で、やはり薬を貰いに来ている一人の仲間と落ち合った。それが恩地小左衛門の屋敷のものだと云う事は、蘭袋の内弟子と話している言葉にも自ら明かであった。彼はその仲間が帰ってから、顔馴染の内弟子に向つて、「恩地殿のような武芸者も、病には勝てぬと見えますな。」と云つた。「いえ、病人は恩地様ではありません。あそこに御出でになる御客人です。」——人の好きそうな内弟子は、無頓着にこう返事をした。

それ以来喜三郎は薬を貰いに行く度に、さりげなく兵衛の容子を探つた。ところがだんだん聞き出して見ると、兵衛はちようど平太郎の命日頃から、甚太夫と同じ痲病のために、苦しんでいると云う事がわかつた。して見れば兵衛が祥光院へ、あの日に限つて詣でなかつたのも、その病のせいに違いなかつた。甚太夫はこの話を聞くと、一層病苦に堪えられなくなつた。もし兵衛が病死したら、勿論いくら打ちたくとも、敵の打てる筈はなかつた。と云つて兵衛が生きたにせよ、彼自身が命を墜したら、やはり永年の艱難は水泡に帰すのも同然であつた。彼はついに枕を噛みながら、彼自身の快癒を祈ると共に、併せて敵瀬沼兵衛の快癒も祈らざるを得なかつた。

が、運命は飽くまでも、田岡甚太夫に刻薄であつた。彼の病は重りに重つて、蘭袋

の薬を貰つてから、まだ十日と経たない内に、今日か明日かと云う容態ようたいになつた。彼はそう云う苦痛の中にも、執念しゅうねんく敵打かたきうちの望を忘れなかつた。喜三郎は彼の呻吟しんぎんの中に、しばしば八幡大菩薩はちまんたいぼさつと云う言葉がかすかに洩れるのを聞いた。殊にある夜は喜三郎が、例のごとく薬を勧めると、甚太夫はじつと彼を見て、「喜三郎。」と弱い声を出した。それからまたしばらくして、「おれは命が惜しいわ。」と云つた。喜三郎は畳へ手をついたまま、顔を擡もたげる事さえ出来なかつた。

その翌日、甚太夫は急に思い立つて、喜三郎に蘭袋を迎えにやつた。蘭袋はその日も酒氣を帯びて、早速彼の病床を見舞つた。「先生、永々の御介抱、甚太夫辱かたじけなく存じ申す。」——彼は蘭袋の顔を見ると、床とこの上に起直おきなつて、苦しそうにこう云つた。「が、身ども息のある内に、先生を御見かけ申し、何分願ねがひたい一儀ひととぎがござる。御聞き届け下さりようか。」蘭袋は快く頷うなずいた。すると甚太夫は途切とぎれ途切とぎれに、彼が瀬沼兵衛をつけ狙ねらう敵打かたきうちの仔細しさいを話し出した。彼の声はかすかであつたが、言葉は長物語の間にも、さらに乱れるようす容子がなかつた。蘭袋は眉をひそめながら、熱心に耳を澄すませていた。が、やがて話が終おひると、甚太夫はもう喘あえぎながら、「身ども今こん生じょうの思い出には、兵衛の容態ようたいが承うけたまわりとうござる。兵衛はまだ存命でござるか。」と云つた。喜三郎はすでに泣いていた。蘭袋も

この言葉を聞いた時には、涙が抑えられないようであった。しかし彼は膝を進ませると、病人の耳へ口をつけるようにして、「御安心めされい。兵衛殿の臨終は、今朝寅の上刻に、愚老確かに見届け申した。」と云つた。甚太夫の顔には微笑が浮んだ。それと同時に窶れた頬へ、冷たく涙の痕が見えた。「兵衛——兵衛は冥加な奴でござる。」——甚太夫は口惜しそうに呟いたまま、蘭袋に礼を云うつもりか、床の上へ乱れた頭を垂れた。そうしてついに空しくなつた。……

寛文十年陰曆十月の末、喜三郎は独り蘭袋に辞して、故郷熊本へ帰る旅程に上つた。彼の振分けの行李の中には、求馬左近甚太夫の三人の遺髪がはいっていた。

後談

寛文十一年の正月、雲州松江祥光院の墓所には、四基の石塔が建てられた。施主は緊く秘したと見えて、誰も知つてゐるものはなかつた。が、その石塔が建つた時、二人の僧形が紅梅の枝を提げて、朝早く祥光院の門をくぐつた。

その一人は城下に名高い、松木蘭袋に紛れなかつた。もう一人の僧形は、見る影もな

く病み耄ほうけていたが、それでも凛り々しい物ごしに、どこか武士らしい容よう子すがあつた。二人は墓前に紅梅の枝を手向たむけた。それから新しい四基の石塔に順々に水を注いで行つた。：

後年こうねん黄檗おうはく慧林えいりんの会下えかに、当時の病み耄けた僧形とよく似寄つた老衲ろうのうし子しがあつた。これも順じゆん鶴かくと云う僧そう名みのほかは、何も素性すじようの知れない人物であつた。

(大正九年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集³」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第二卷」筑摩書房

1971（昭和46）年4月5日初版第1刷発行

初出：「雄弁」

1920（大正9）年5月

入力：j.ujiyama

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2017年6月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或敵打の話

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>